授業構想

――「ニャーゴ」（二年）「ゆうすげ村の小さな旅館」（三年）――

廣田隆志

二教材「ニャーゴ」「ゆうすげ村の小さな旅館」について、次の順序で記述する。

Ⅰ　全文
Ⅱ　学習目標
Ⅲ　文章構成と時間・時数
Ⅳ　授業構想
　1　教材文の各場面
　2　教材解釈
　3　本時の目標
　4　板書
　5　発問・説明
　6　まとめ

一、「ニャーゴ」（みやにし　たつや・文）　二年下　東京書籍

Ⅰ　全文

「いいですか、これが　ねこです。この　顔を　見たら、すぐに　にげなさい。つかまったら、さい後、あっというまに　食べられて　しまいますよ。」

子ねずみたちは、先生の　話を　いっしょうけんめい　聞いています。

でも、あれえ。先生の　話を　ちっとも　聞かずに、おしゃべりしている　子ねずみが　三びき　いますよ。

しばらくして、三びきが　気が　つくと、みんな　いなく　なって　いました。

「あれれ、だれも　いないよ。」

「それじゃあ、ぼくたちは　ももを　とりに　行こうか。」
「うん、行こう　行こう。」
子ねずみたちが　歩きだした　その　ときです。
ニャーゴ
三びきの　前に、ひげを　ぴんと　させた　大きな　ねこが、手を　ふり上げて　立って　いました。
三びきは、かたまって　ひそひそ声で　話しはじめました。
「びっくりしたね。」
「この　おじさん　だれだあ。」
「きゅうに　出て　きて、ニャーゴ　だって。」
「おじさん、だあれ。」
ねこは　どきっと　しました。そこで、子ねずみは　もう　いちど、
「おじさん、だあれ。」
と、元気よく　聞きました。
「だれって、だれって------たまだ。」
ねこは、言って　しまってから、少し　顔を　赤く　しました。
「そうか、たまか。ふうん。」
「たまおじさん、ここで　何　してるの。」
「何って、べつに。」
ねこは、口を　とがらせて　答えました。
「じゃあ、ぼくたちと　いっしょに、おいしい　ももを　とりに　行かない。」
それを　聞いて、ねこは　思いました。
（おいしい　ももか。うん、うん。その　後で　この　三びきを。ひひひひ。今日は、なんて　ついて　いるんだ。）
ねこは、子ねずみたちを　せなかに　のせると、ももの　木の方へ　走って　いきました。
三びきの　子ねずみと　ねこは、ももを　食べはじめました。
（うまい。でも、たくさん　食べたら　いけないぞ。おなか　いっぱいに　なったら、こいつらが　食べられなく　なるからな。ひひひひ。）
ねこは、ももを　食べながら　思いました。
ももを　食べおわると、三びきの　子ねずみと　ねこは、のこった　ももを　もって、帰って　いきました。
そして、あと　少しの　ところまで　来た　ときです。ねこは、ぴたっと　止まって、
ニャーゴ
できるだけ　こわい　顔で　さけびました。
そして、

「おまえたちを　食って　やる。」
と　言おうと　した　その　ときです。
ニャーゴ
ニャーゴ
ニャーゴ
三びきが　さけびました。
「へへへ、たまおじさんと　はじめて　会った　とき、おじさん、ニャーゴって　言ったよね。あの　とき、おじさん、こんにちはって　言ったんでしょう。そして、今の　ニャーゴが　さよならなんでしょ。」
「おじさん、はい、これ　おみやげ。」
「みんな　一つずつだよ。ぼくは、弟に　おみやげ。」
「ぼくは、妹に。」
「ぼくは、弟に。たまおじさんは、弟か　妹　いるの。」
「おれの　うちには、子どもが　いる。」
ねこは、小さな　声で　答えました。
「へえ、何びき。」
「四ひきだ。」
ねこが、そう　言うと、
「四ひきも　いるなら　一つじゃ　足りないよね。ぼくの　あげる。」
「ぼくのも　あげるよ。」
「ぼくの　ももも。」
「ううん。」
ねこは、大きな　ためいきを　一つ　つきました。
ねこは、ももを　かかえて　歩きだしました。子ねずみたちが、手を　ふりながら　さけんで　います。
「おじさあん、また　行こうね。」
「やくそくだよ。」
「きっとだよ。」
ねこは、ももを　だいじそうに　かかえたまま、
ニャーゴ
小さな　声で　答えました。

Ⅱ　学習目標

○　子ねずみたちの無邪気さからの優しさや思いやりの心が、ねずみの天敵であるねこのたまに伝わったことが分かる。
○　場面の様子について、登場人物の行動を中心に想像を広げながら読むことができる。
○　文章の内容と自分の経験とを結び付けて、自分の思いや考えをまとめ、発表し合うことができる。

○　文の中における主語と述語との関係に注意して読むことができる。

Ⅲ　文章構成と時間・時数

場面	ページ	時間	時数
一	P120L3 ～ P121L6	1	1
二	P121L7 ～ P123L4	1	2
三	P123L5 ～ P124L4	1	3
四	P124L5 ～ P127L4	1	4
五	P127L5 ～ P127L13	1	5

Ⅳ　授業構想

1　第一場面

ア　ニャーゴ

イ「いいですか、ウこれがエねこです。ウこの顔を　見たら、すぐにげなさい。つかまったらオさい後、カあっというまにキ食べられて　しまいますよ。」

ク子ねずみたちは、先生の　話をケいっしょうけんめい　聞いていります。

コでも、あれえ。先生の　話をサちっとも　聞かずに、おしゃべりしている　子ねずみが　三びきシいますよ。

シしばらくして、三びきが　スきが　つくと、セみんな　いなく　なって　いました。

ソ「あれれ、タだれも　いないよ。」

チ「それじゃあ、ぼくたちは　ツももを　とりに　行こうか。」

「うん、行こう　行こう。」

2　教材解釈（分かち書きは略）

ア「ニャーゴ」

・　ねこの鳴き声。一般的な鳴き声は「ニャー」「ニャン」「ニャーン」などであるが、「ニャーゴ」と比較してみると「ゴ」があることにより、凄みが出て相手を脅すような恐ろしそうな鳴き声になる。

イ「いいですか」

・　「いい」＝「よい」のくだけた言い方。

・　そうすることが当然であったり、必要であったりするさまを表す。ぜひとも。必ず。

ウ「これが」「この顔が」

・　P120の挿絵にある黒板に描かれたねこの顔を指している。

エ「ねこ」

・　鳴き声に接尾語コを添えた語。また、ネは鼠の意とも。

・　広くはネコ目（食肉類）ネコ科の哺乳類のうち小形のものの総称。体はしなやかで、鞘に引きこむことのできる爪、ざらざらした舌、鋭い感覚のひげ、足のうらの肉球などが特徴。一般には家畜のネコをいう。在来種のネコは奈良時代に中国から渡来したとされる。

オ「さい後」

・　（「〜（た）が――」「〜たら――」の形で）いったん〜したら、それっきり。百年目。

カ「あっというま」

・　「あっ」と言う間ぐらいの短い時間。ほんのわずかな間。

キ「食べられて」

・　ねこは現在では愛玩用になっているが、古くはエジプト時代から鼠害対策とされてきた。それを生かしてねことねずみの関係を説明している。

・　死ぬということ。

ク「先生の話」

・　子ねずみたちの学校であろう。ねずみの先生がねこ対策を授業で行っている。

ケ「いっしょうけんめい聞いています」

・　「いっしょうけんめい」＝ありったけの力を出してがんばる様子。

・　命に関わることだから、先生も真剣に説明し、子ねずみたちも真面目に熱心にがんばって聞いている。

コ「でも、あれえ」

・　「でも」＝それにしても。しかし。けれども。

・　「あれ」＝驚いたとき、不審に思ったときに出す言葉。

・　語り手が読者に語りかける口調なので、「あれ」が「あれえ」となっており、読者に親しみを持たせる表現になっている。

サ「ちっとも聞かずに、おしゃべりしている子ねずみが三びき」

・　「ちっとも」＝ほんの少しも。全然。全く。

・　「聞かず」

①　聞かない。聞かぬ。

②　先生の話を全然聞いていないため、ねこのことを全く知らず、ねこを恐れないことの伏線になっている。

・　「おしゃべり」＝よくしゃべること。むだばなし。

P121L5に「それじゃあ、ぼくたちはももをとりに行こうか。」と言っていることから、このおしゃべりはももを取り

に行く話をしていたのであろう。

・「子ねずみが三びき」

主人公（中心人物）が、この三びきの子ねずみであり、副主人公（対象人物）がねこ。

シ「しばらく」

・少しの間。しばし。当分の間。

ス「気がつく」

・気づく。感づく。そのことに考えが及ぶ。

セ「みんな」

・先生や他の子ねずみたち。

ソ「あれれ」

・「あれえ」と同じ。

タ「だれもいないよ」

・おしゃべりに夢中になっていて、先生の話（授業）が終わったことも他の子ねずみたちが帰ったことも気づかずにいた。

チ「それじゃあ」

・「それでは」＝それなら。そういうことなら。

ツ「ももをとりに行こうか」

・おしゃべりの話の内容。（前出）

3　本時の目標

恐ろしいねこについての先生の話を、三びきの子ねずみたちはおしゃべりをしていて全然聞いていなかったから、ねこのことを全く知らないことが分かる。

4　板書（分かち書きは略）

これが　・黒ばんの絵

この顔　・ねこ

さい後　・それっきり（説明）

あっというま　・ほんのみじかい間

食べられて　・しぬ

先生の話　・ねずみの学校

・べん強

あれえ　・かたり手（説明）

・おどろいている

ちっとも　・ぜんぜん

・ほんの少しも

聞かず　・聞かない

・聞いていない

おしゃべり　・ももをとりに行く話

しばらく　・少しの間
みんな　・先生やほかの子ねずみたち
だれもいないよ　・話にむちゅう
それじゃあ　・それなら
・そういうことなら

5　発問・説明

(a)「これが」「この顔」
①　先生が「これが」「この顔」と言っているのは、P120の絵のどれのことか。
②　「これが」「この顔」とは、誰のことか。

(b)「さい後」というのは、「それっきり」という意味である。

(c)「あっというま」とは、どれぐらいのことか。

(d)「食べられて」というのは、どうなることか。

(e)「先生の話」
①　「先生の話」と書いてあるが、ここはどんな所か。
②　今、先生や子ねずみたちは、何をしているのか。

(f)「あれえ。」と言っているのは、この話をしている人で「語り手」と言う。この語り手が「あれえ。」と言ったのはなぜか。

(g)「ちっとも」を別の言葉で言うと、どんな言葉になるか。

(h)「聞かず」とは、どうしていることか。

(i)子ねずみたちは、どんな「おしゃべり」をしていたと思うか。

(j)「しばらく」とは、どのくらいのことか。

(k)「みんな」とは、誰たちのことか。

(l)子ねずみたちが「だれもいないよ」と言っているが、なぜ気がつかなかったのか。

(m)「それじゃあ」を別の言葉で言うと、どんな言葉になるか。

6　まとめ

三びきの子ねずみたちに手紙を書こう。

1　第二場面

子ねずみたちが　歩きだした　その(ア)　ときです。
ニャーゴ
三びきの　前に、ひげを(イ)　ぴんと(ウ)　させた　大きな　ねこが、手(エ)を　ふり上げて(オ)　立って　いました。
三びきは、かたまって(カ)　ひそひそ声で　話しはじめました(キ)。
「びっくりしたね。」(ク)
「この　おじさん　だれだあ。」(ケ)
「きゅうに　出て　きて、ニャーゴ　だって。」(コ)

サ
「おじさん、だあれ。」
ねこは　どきっと　しました。そこで、子ねずみは　もう　いちど、
「おじさん、だあれ。」
と、元気よく　聞きました。
「だれって、だれって------たまだ。」
ねこは、言って　しまってから、少し　顔を　赤く　しました。
「そうか、たまか。ふうん。」
「たまおじさん、ここで　何　してるの。」
「何って、べつに。」
ねこは、口を　とがらせて　答えました。
「じゃあ、ぼくたちと　いっしょに、おいしい　ももを　とりに　行かない。」
それを　聞いて、ねこは　思いました。
（おいしい　ももか。うん、うん。その　後で　この　三びきを。ひひひひ。今日は、なんて　ついて　いるんだ。）

2　教材解釈

ア「そのとき」

・「その」は「歩きだした」を指し、「歩きだしたとき」にねこが出現したことを強調している。

イ「ひげ」

・動物の口のあたりの長い毛。

ウ「ぴんと」

・まっすぐに強く引っ張った様子。
・見るからに恐ろしそうなねこの様子を表している。

エ「手をふり上げて」

・「ふり上げる」＝勢いよく上の方へあげる。
・体を大きく見せ、飛びかかるような姿勢で威嚇している。

オ「かたまって」

・「かたまる」＝集まる。
・先生の話を聞いていた子ねずみであればすぐ逃げたのであろうが、ねこのことを知らないこの三びきの子ねずみは逃げずに集まっている。

カ「ひそひそ」

・ほかの人に聞こえないように小さな声で話す様子。

キ「話しはじめました」

・話しはじめた内容が、次に示されている。三びきの子ねずみが一ぴきずつ順に話している。

ク「びっくりしたね」
・　子ねずみたちが歩き出した途端に気配もなく、ねこが現れたのに驚いている。怖がっているのではない。
ケ「このおじさんだれだあ。」
・　ねこのことを「おじさん」「だれだあ」と言っていることからも、ねこのことを全く知らないことが分かる。
・　「だれだ」ではなく「だれだあ」という口調からものんびりして緊迫感が全くないことが分かる。
コ「きゅうに出てきて、ニャーゴだって」
・　「きゅう」＝突然。にわかに。
・　「だって」＝〜だそうだ。〜だということだ。
サ「だあれ」
・　おじさんのことを知りたいというだけで、ねこに向かって無心になって聞いており、「だれだあ」と同じく緊迫感がまるでないし、子ねずみたちの無邪気さ、天真爛漫さが表れている。
シ「どきっと」
・　突然の出来事にひどく驚いて心臓が一瞬大きく鼓動するさま。心臓に衝撃を受けるほど驚きが大きいさま。
・　子ねずみたちが、ねこの自分を全く怖がらないので当てがはずれたどころか、逆に誰かと問い返されて驚いている。
ス「もういちど」
・　一度目に聞かれた時は、どきっとして答えなかったので、子ねずみたちはおじさんが誰なのかをどうしても知りたくて繰り返し聞いている。子ねずみたちは、このおじさんに興味を持ち始めている。
セ「元気よく」
・　「元気」＝勢いのよい様子。
・　物おじ（びくびくすること。怖がること。）することなく、勢いよく聞いていることからも無邪気な様子が表れている。
ソ「だれって、だれって」
・　二度くり返していることから、ためらいの様子が分かる。
タ「-----」
・　名前を答えるべきかどうか迷い考えている。
チ「たまだ」
・　子ねずみたちの元気のよさや無邪気さにけおされて、名前を答えてしまう。
・　「たま」という名前も子ねずみたちに威圧感を与えるものでなく、平凡でありふれた名前である。
ツ「言ってしまってから」
・　「言ってしまってから」という表現に「ついつい言ってしまっ

た」「切羽つまって言ってしまった」という後悔の気持ちが伺われる。それが次の文の顔を赤くしたことにつながっている。

テ「少し顔を赤くしました」

- 「赤くなる」＝恥ずかしさで顔が充血する。
- ついつい自分の名前を答えてしまったことに、ねこの俺としたことがと恥ずかしく思っている。

ト「ふうん」

- 「ふん」＝納得・承諾の意を表す丁寧でない語。
- 名前を聞いて納得しているが、丁寧な答え方ではない「ふうん」から、一目おいた風ではなくて自分たちと同じような生き物ぐらいにしか思っていない。

ナ「ここで何してるの」

- 「子ねずみたちが歩きだしたそのとき」に、ねこは「手をふり上げて立って」いたから、子ねずみたちにとっては自然な問いかけである。

ニ「べつに」

- 「別に」＝これといって特に。特別には。
- 子ねずみたちを待ち伏せしていて食べようとしていたなどとは答えられず、特に何をしていたというわけではないとごまかして、短い言葉で答えている。

ヌ「口をとがらせて」

- 「口をとがらせる」＝不満があるような顔つきをする。
- 子ねずみたちが一向に怖がらず平気で次々と聞いてくるので、ねこの方から攻勢ががかけられず受け太刀（守勢の立場。押され気味。）になっているので憮然（失望や不満でむなしくやりきれない思いでいるさま）とした表情をしている。

ネ「ぼくたちといっしょに」

- 子ねずみたちはねこを友達ぐらいにしか思っていなくて、無邪気に友好的に連れ立って行こうと誘っている。

ノ「うん、うん」

- 承諾・肯定の意を何回も表す声。
- （　）の中はねこが思ったこと（心内語）で、思わぬ展開に喜びうなずいている。よしよし。しめしめ。

ハ「その後でこの三びきを」

- 「食べてやろう」が省略されている。

ヒ「ひひひひ」

- 「ひひ」＝気味の悪い、または下品な笑い声を表す語。
- 気持ちの悪い内心の笑い声。

フ「なんてついているんだ」

- 「なんて」＝たいそうまあ。なんと。

・「ついている」＝運がいい。ついてる。
・なんと運がいいんだと、ももと子ねずみたちの両方を食べることをもくろんで（たくらむ。計画する。）喜んでいる。

3　本時の目標

ねこは、ねこを知らず怖さも知らない無邪気な子ねずみたちに戸惑いながら、一緒にももを取りに行くことになったことが分かる。

4　板書

ひげをぴん　・おそろしいようす
手をふり上げて　・おどしている
・こわがらせている
かたまって　・あつまって
ひそひそ　・聞こえないように小さな声で
びっくりしたね　・きゅうに出てきたから
・こわがっていない
だあれ　・ねこを知らない
どきっと　・こわがらない
・びっくり
・よそうがはずれる
だれって――――　・まよっている
・考えている
顔を赤く　・はずかしい
べつに　・ごまかしている
口をとがらせて　・おもしろくない
・こわがらない
うん、うん　・へい気で聞いてくる
・しめしめ
・よしよし
三びきを　・食べてやろう
ひひひひ　・気もちわるいわらい方
ついている　・うんがいい
・よろこんでいる

5　発問・説明

(a)「ひげをぴん」とさせた大きなねこから、どんな様子が分かるか。

(b)「手をふり上げて」

①　どんな様子なのかやってみよう。（動作化）

② ねこは、子ねずみたちになぜそんな格好を見せたのか。

(c) 「かたまって」とは、どういう様子か。

(d) 「ひそひそ」とは、子ねずみたちは、どんな話し方をしたのか。

(e) 「びっくりしたね」

① 子ねずみたちは、何で「びっくりした」のか。

② 子ねずみたちは、ねこをこわがっているのか。

(f) 子ねずみたちは、なぜ「だあれ」と聞いているか。

(g) ねこが「どきっと」したのはなぜか。

(h) 「だれかって」を二回繰り返し、「------」とあるのは、ねこのどんな気持ちが表れているか。

(i) ねこが「少し顔を赤く」したのは、どんな気持ちからか。

(j) 「べつに」

① ねこは、本当は何をしようとしていたのか。

② 「べつに」と答えたのはなぜか。

(k) ねこが「口をとがらせた」のはなぜか。

(l) 「うん、うん」を別の言葉で言うと、どんな言葉になるか。

(m) 「ひひひひ」は、どんな笑い方か。

(n) 「ついている」

① 別の言葉で言うと、どんな言葉になるか。

② ねこは、どんな気持ちでいるか。

6 まとめ

ねこの気持ちを入れて、子ねずみたちに手紙を書こう。

1 第三場面

ねこは、子ねずみたちを (ア)せなかに のせると、ももの 木の方へ 走って いきました。

(イ)三びきの 子ねずみと ねこは、ももを 食べはじめました。

(ウ)(うまい。でも、たくさん 食べたら いけないぞ。おなか いっぱいに なったら、(エ)こいつらが 食べられなく なるからな。ひひひひ。)

ねこは、ももを 食べながら 思いました。

(オ)ももを 食べおわると、三びきの 子ねずみと ねこは、のこった (カ)ももを もって、(キ)帰って いきました。

2 教材解釈

ア「せなかにのせる」

- 子ねずみたちが逃げないようにするため。
- 早くももの木のある所へ行きたいため。
- 少しでも早く子ねずみを食べたいため。
- 子ねずみたちに友達と思わせ油断させるため。

イ「三びきの子ねずみたちとねこは、ももを食べはじめました」
・　ねこは、子ねずみたちと同じようにももを食べることによって、警戒心を起こさせないよう友好的な姿を演じている。
ウ「うまい。でも、たくさん食べたらいけないぞ」
・　もものこと。
エ「こいつらが食べられなくなるからな」
・　「こいつら」＝三びきの子ねずみたち。
・　後で子ねずみたちを食べるための準備と計画を立てている。
オ「ももを食べおわる」
・　子ねずみたちはももをお腹いっぱいに食べたであろうが、ねこは計画通りお腹いっぱいには食べていない。
カ「のこったももをもって」
・　ももを持って帰ったのは、子ねずみたちだけ。ねこは、子ねずみを食べるつもりだから持っていない。
・　このもものおみやげの配分によって、ねこは子ねずみたちを食べることを断念することになる伏線になっている。
キ「帰って」
・　行く時と同じように、ねこは子ねずみたちを背中に乗せて帰って行った。

3　本時の目標

ねこは、子ねずみたちとももを食べながら、後で子ねずみたちを食べる準備や計画を立てていることが分かる。

4　板書

せなかにのせる　・にげないように
・はやく行けるように
・はやく食べたいから
・友だちと思わせるため
・ゆだんさせるため

食べはじめました　・友だちとしてのつきあい

こいつら　・子ねずみたち

食べおわる　・子ねずみ――おなかいっぱい
・ねこ――少しだけ

のこったもも　・子ねずみたちだけ
・ねこ――子ねずみたちを食べるつもり
・ねこのせなかにのって

帰って

5　発問・説明

(a)　ねこが、子ねずみたちを背中に乗せて走って行ったのは、どん

なわけが考えられるか。

(b) ねこが、子ねずみたちと一緒になってももを食べたのは、何のためか。

(c) 「こいつら」とは誰たちのことか。

(d) 「食べられなくなる」というのは、子ねずみたちを食べるための何を考えているのか。

(e) ももを「食べおわる」

① 子ねずみたちは、ももをどのくらい食べたのか。

② ねこはどのくらいか。

(f) 「のこったもも」

① 持って帰ったのは誰か。

② ねこが持って帰らなかったのはどういうつもりか。

(g) 「帰って」いく時は、どのようにして帰ったのか。

6 まとめ

ねこの気持ちを入れて、子ねずみたちに手紙を書こう。

1 第四場面

そして、あと(ア)少しの ところまで 来た ときです。ねこは、ぴたっと(イ)止って、

ニャーゴ

できるだけ(ウ)こわい 顔で(エ)さけびました。

そして、

「おまえたちを(カ)食って やる。」

と 言おうと した(キ)その ときです。

ニャーゴ(ク)

ニャーゴ

ニャーゴ

三びきが(ケ)さけびました。

「へへへ(コ)、たまおじさんと はじめて 会った ときに、おじさん、ニャーゴって 言ったよね(サ)。あの ときに、おじさん、こんにちは って 言ったんでしょう(シ)。そして、今の ニャーゴが さよならなんでしょ(ス)。」

「おじさん、はい、これ(セ)、おみやげ。」

「みんな(ソ) 一つずつだよ。ぼくは、弟に(タ) おみやげ。」

「ぼくは、妹に(タ)。」

「ぼくは、弟に。たまおじさんは、弟か(チ) 妹 いるの。」

「おれの うちには、子どもが いる。」

ねこは、小さな(ツ) 声で 答えました。

「へえ(テ)、何びき。」

「四ひきだ。」
ねこが　そう　言うと、
「四ひきも　いるなら　一つじゃ　足りないよね。ぼくの　あげる。」
ト「ぼくのも　あげるよ。」
ト「ぼくの　ももも。」
ナ「ううん。」
ナねこは、大きな　ためいきを　一つ　つきました。

2　教材解釈

ア「あと少しのところまで」
・　子ねずみたちがももを取りに行こうとして、ねこに出会った場所の少し手前の所であろう。

イ「ぴたっととまって」
・　「ぴたっと」＝続いていた物事が急に完全に止まるさま。
・　今まで友好的な態度を取っていたねこが豹変して、本性をむき出して攻撃に出ようとしたことを表している。

ウ「できるだけ」
・　できると思われる限り。やれるだけ。

エ「こわい顔」
・　恐ろしい顔。
・　子ねずみたちを威嚇して食べるために。

オ「さけびました」
・　「さけぶ」＝大きな声を張り上げる。

カ「おまえたちを食ってやる」
・　かぎかっこ（「　」）がついているが、言おうとしたことを示しているだけで実際には言っていない。言えなかった。

キ「そのとき」
・　第二場面の冒頭の文「子ねずみたちが歩きだしたそのときです」にも使われている。
・　急に、局面（事のなりゆき）が変わる時に使われている。

ク「ニャーゴ」
・　三回繰り返されていることから、子ねずみが一ぴきずつ叫んだのであろう。

ケ「さけびました」
・　ねこが「ニャーゴ」と叫んだので同じように叫んだのであろうが、ねこが「食ってやる」と言おうとしたことの機先を制した（ほかの人より先にやって相手の勢いや計画をくじいた）ことになる。
・　ねこは、出鼻（物事のし始め）をくじかれたことになる。

コ「へへへ」

・　辞書の意味としては「人を馬鹿にしてせせら笑う声」であるが、この場合は後に出てくる「ニャーゴ」の意味を自分たち流に解釈していることから、いたずらっ子のような自慢げな様子の笑いであろう。

サ「よ」

・　相手に念を押し確かめる意を表す。

シ「でしょう」

・　推量の意を表す。「だろう」の丁寧な言い方。

・　「ニャーゴ」＝「こんにちは」という子ねずみたちの解釈。

ス「なんでしょ」

・　丁寧に言うと「なのでしょう」。

・　「ニャーゴ」＝「さよなら」という子ねずみたちの解釈。

セ「これ」

・　「のこったももをもって帰って」きた、そのもののこと。

ソ「みんな一つずつ」

・　「みんな」＝三びきの子ねずみとねこ。

・　ももは四個。

タ「弟」「妹」

・　三びきの子ねずみたちは長男。

・　弟や妹へのおみやげを持って帰ろうとする兄らしい優しさ。

チ「弟か妹いるの」

・　子ねずみたちは、自分たちの境遇（長男）からの発想で、ねこに「弟」「妹」を聞いている。

ツ「小さな声で」

・　ねこは自分の思い通りに事が進まず、逆に子ねずみたちに主導権を奪われて、子ねずみたちの問いかけに家族のことを答えなければならなくなり、それで「小さな声」になっている。

テ「へえ」

・　驚きの心を表す応答の声。

・　子ねずみたちは弟か妹の答えを予想していたが、自分たちと同じ子どもがいると聞いて驚いた声になっている。

ト「ぼくのあげる」「ぼくのもあげるよ」「ぼくのももも」

・　子ねずみたちは弟か妹におみやげのももを持って帰るつもりをしていたが、ねこの子ども四ひきにももが一つでは足りないと考えて、ねこの子どもたち一ぴきに一つずつ渡せるようにとする優しさや思いやる心がある。

ナ「「ううん。」ねこは、大きなためいきを一つつきました」

・　「ううん」＝ためいき。

・　「ためいき」＝がっかりしたときに思わず出る、大きな息。

・　「つきました」

「つく」＝息をする。

・「ううん」をねこの気持ちに置き換えて言うと、

① 「これでは食うことはできないな。」

② 「こんなにやさしいやつらを食えないな。」

③ 「あきらめるしかないな。」

④ 「変なやつらだな。」

⑤ 「今日は変な日だな。」など。

3　本時の目標

子ねずみを食べようとしたねこは、子ねずみたちの子供らしい解釈や発想、優しさに食べることを断念したことが分かる。

4　板書

あと少しのところまで　・ねこと出会ったところ

ぴたっととまって　・きゅうにとまって

こわい顔　・おどしている

・こわがらせている

おまえたちを食ってやる・言っていない

・言おうとしたが言えなかった

ニャーゴ

・こんにちは

さよなら　子ねずみたちの考え

これ　・もも

みんな　・三びきの子ねずみとねこ

弟、妹　・兄さんらしさ

小さな声　・やさしさ

あげる　・家ぞくのこと

・やさしさ

ためいき　・思いやり

・がっかり

ううん　・ううん

・これでは食えないな

・やさしいやつを食えないな

・あきらめるしかないな

・へんなやつばかりだな

・きょうはへんな日だなあ

5　発問・説明

(a)　「あと少しのところまで」とは、第二場面のどこのことか。

(b) 「ぴたっととまって」とは、どんな止まり方か。

(c) ねこが「こわい顔」をしたのは、何のためか。

(d) 「おまえたちを食ってやる」

① この言葉を言ったのか、言えなかったのか。

② なぜ、言えなかったのか。

(e) 「ニャーゴ」を子ねずみたちは、どんな意味だと考えたのか。

(f) 「これおみやげ」の「これ」とは何か。

(g) 「みんな一つずつ」の「みんな」とは、誰たちのことか。

(h) 「弟」や「妹」にもものおみやげを持って帰ろうとする兄さんの子ねずみたちから分かることは何か。

(i) ねこが「小さな声」で答えたのはなぜか。

(j) 「ぼくのあげる」「ぼくのもあげるよ」「ぼくのもも」という子ねずみたちから、どんなことが分かるか。

(k) 「ためいき」

① 「ためいき」は、感心した時かがっかりした時にするが、この場合はどちらか。

② がっかりした時のためいきをついてみよう。(動作化)

③ 話の中でねこのついた「ためいき」は、どんな言葉か。

(l) 「ううん」をねこの気持ちになって、別の言葉で言うとどんな言葉になるか。

6 まとめ

ねこの気持ちを入れて、子ねずみたちに手紙を書こう。

1 第五場面

ねこは、ももを(ア)かかえて(イ)手を ふりながら 歩きだしました。子ねずみたちが、(ウ)さけんで います。

「おじさあん、(エ)また 行こうね。」

(ウ)「やくそくだよ。」

(ウ)「きっとだよ。」

ねこは、ももを(オ)だいじそうに(カ)ニャーゴ かかえたまま、(キ)小さな 声で 答えました。

2 教材解釈

ア「かかえて」

・ 「かかえる」＝腕で、胸やわきに抱くようにして持つ。

・ ももが四つもあるから、かかえないと持ち運べない。

イ「手をふりながら」

・ 子ねずみたちがねこに親しみを持ち、友達のように思っているしぐさである。

ウ「おじさあん」「やくそくだよう」「きっとだよう」

・　遠くから叫んでいるため、「おじさん」が「おじさあん」、「やくそくだよ」が「やくそくだよう」、「きっとだよ」が「きっとだよう」と音がのびている。

・　三びきが、かわるがわる叫んでいる。

・　「きっと」＝必ず。確かに。間違いなく。

エ「また行こうね」

・　「ももを取りに」が省略。

オ「だいじそうに」

・　大切に扱う様子。

・　子ねずみたちが弟や妹のおみやげのももを、わが子のためにくれたから。

カ「ニャーゴ」

・　怖がらせるためのニャーゴではなく、子ねずみたちの言うように「さよなら」のニャーゴかもしれない。他に、「分かったよ、また行こう」「うん、やくそくする」「ももをありがとうな」「じゃあな」などが考えられる。

キ「小さな声でこたえました」

・　子ねずみたちの優しさや思いやりを分かってはいるが、子ねずみたちにしてやられた気持ちは消えず意気消沈して元気がないのが「小さな声」であろう。

3　本時の目標

ももを大事そうに抱えたねこは、子ねずみたちの「また行こうね。」に、元気がなく小さな声でニャーゴと答えたことが分かる。

4　板書

かかえて
手をふりながら
おじさあん
だよう

また行こうね
きっと
だいじそうに

ニャーゴ

・ももが四つもあるから
・ねこと友だちの気もち
・「おじさん」
・「やくそくだよ」
・「きっとだよ」
・遠くからさけんでいるから
・ももをとりに
・かならず
・大切なようす
・子どもにくれたおみやげ
・さよなら
・わかったよ、また行こう

・うん、やくそくする
・ももをありがとうな
・じゃあな
・元気がない

小さな声

5　発問・説明

a　「かかえて」

①　「かかえる」というのは、腕で胸などで抱くようにして持つことである。

②　なぜ「かかえて」いたのか。

b　子ねずみたちは、ねこにどんな気持ちで手をふっているのか。

c　「おじさあん、また行こうね」「やくそくだよう」「きっとだよう」

①　「おじさん」が「おじさあん」、「やくそくだよ」が「やくそくだよう」、「きっとだよ」が「きっとだよう」となっているのはなぜか。

②　「また行こうね」とは、どこへ行こうと言っているのか。

③　「きっと」を別の言葉で言うと、どんな言葉になるか。

d　「だいじそうに」

①　どんな様子のことか。

②　なぜ「だいじそうに」抱えているのか。

e　ねこは「ニャーゴ」と答えているが、このニャーゴを人間の言葉に直してみよう。

f　ねこは、なぜ「小さい声」で答えたのか。

6　まとめ

子ねずみたちの気持ちも入れて、ねこに手紙を書こう。

二、「ゆうすげ村の小さな旅館」（茂市久美子・文）三年上　東京書籍

I　全文　きせつ

わか葉のきせつでした。ゆうすげ村のゆうすげ旅館では、山に林道を通す工事の人たちがとまりに来て、ひさしぶりに、六人ものたいざいのお客さんがありました。ひとりで旅館の切りもりしているつぼみさんは、朝早くから夜おそくまで息をつくひまもありませんでした。

わかいころなら、お客さんの六人ぐらい、何日とまってもへい気でした。でも、年のせいでしょうか。一週間もすると、ふとんを上げたり、おぜんを持ってかいだんを上がったりするのが、つらくなっ

てきたのです。

ある日、つぼみさんは、夕飯の買い物から帰るとちゅう、重い買い物ぶくろをちょっとの間道ばたに下ろして、ついひとり言を言いました。

「せめて、今とまっているお客さんたちが帰るまで、だれか、てつだってくれる人がいないかしら――――。」

そのよく朝のことです。つぼみさんが、朝ご飯のかたづけをしていると、台所に、色白のぽっちゃりとしたむすめが、何本ものダイコンを入れたかごを持って、やってきました。

「おはようございます。わたし、美月っていいます。おてつだいに来ました。」

「えっ？」

つぼみさんが、きょとんとしていると、むすめは、親しげにわらいかけました。

「ほら、きのうの午後、だれかてつだってくれる人がいないかしらって、言ってたでしょ。」

（へんねえ。買い物の帰り、だれにも会わなかったけど――――。）

つぼみさんは、首をかしげました。

「わたし、こちらの畑をかりてる宇佐見のむすめです。父さんが、よろしくって言ってました。これ、あの畑で作ったウサギダイコンです。」

むすめは、持ってきたダイコンを、つぼみさんにさし出しました。

ゆうすげ旅館では、山の中に小さな畑を持っていました。でも、つぼみさんのだんなさんがなくなった後、畑は、たがやす人がいなくなって、草ぼうぼうになっていました。

ところが、去年の秋、そんな畑をかりたいと、宇佐見という男の人がやってきたのです。つぼみさんは、そのままにしておくのが気になっていましたので、こころよくかすことにしました。

「こちらからおねがいしたいほどです。おれいなんていりませんからね。」

つぼみさんの言葉に、男の人は、うれしそうに帰っていきました。

「あなた、宇佐見さんのむすめさんなの。せっかく来てくれたんだから、てつだってもらいましょうか。それにしても、みごとなダイコンだこと。ネズミダイコンなら聞いたことがあるけど、ウサギダイコンっていうのもあるのね――――。」

むすめは、くるくるとよくはたらきました。そうじもせんたくも、さっさとして、まるで、むかしから、ゆうすげ旅館をてつだってきたみたいなのです。

午後になると、むすめは、ちょっと出かけて、たんぽぽの花とよもぎの葉っぱをつんできました。

「今ばんてんぷらにしませんか。それから、ふろふきダイコンとダイコンのサラダ作りませんか。わたし、料理得意なんです。」

こうして、そのばんのゆうすげ旅館のこんだては、たんぽぽの花とよもぎの葉っぱのてんぷらに、ゆずみそのふろふきダイコンと、ダイコンのサラダ、それから、ぶりのてり焼きになりました。てんつゆにも、焼き魚にも、たっぷりのダイコンおろしがつきました。

「いやあ、あまくて、おいしいダイコンだねえ。今夜の料理は、どれもこれも、ほんと、おいしかった。」

お客さんのひょうばんが、あまりよかったので、よく日も、そのまたよく日も、ゆうすげ旅館のこんだては、ダイコンづくしになりました。むすめは、毎朝、とれたてのダイコンを持ってきて、せっせと、ダイコンの料理を作りました。

さて、ダイコンづくしの料理がつづくようになったある日、仕事から帰ってきたお客さんが言いました。

「近ごろ、耳がよくなったみたいなんですよ。小鳥の声や、動物の立てる音が、実によく聞こえるんです。おかげで、工事であやうくこわすとこだった小鳥の巣を見つけて、ほかにうつしてやれましたよ。」

それを聞くと、つぼみさんは、はっとしました。そういえば、つぼみさんの耳も、近ごろ、きゅうによくなった気がします。遠くの小鳥の声や、小川のせせらぎが、しょっちゅう聞こえてくるのです。夜など、みんながねしずまって、あたりがしいんとすると、はるか遠い山の上をふく風の音を、今どのあたりをふいているのか、聞き分けることができました。

またたく間に、二週間がすぎて、たいざいのお客さんたちは、仕事が終わり、ゆうすげ旅館を引き上げていくことになりました。

お客さんが帰って、後かたづけがすむと、むすめはおずおずとエプロンを外しました。

「それじゃあ、わたしも、そろそろおいとまします。」

「えっ、もう帰ってしまうの。」

つぼみさんががっかりすると、むすめは、下を向きました。

「畑のダイコンが、今、ちょうど、取り入れごろなんです。父さんひとりじゃたいへんだから。しゅうかくがおくれると、まほうのきき目が、なくなってしまうんです。」

「まほうのきき目って？」

「耳がよくなるまほうです。夜は、星の歌も聞こえるんですよ。」

（だから、お客さんもわたしも、急に耳がよくなったんだ。）

つぼみさんは、大きくうなずきました。

「じゃあ、引き止めるわけにはいかないわねえ。」

つぼみさんが、これまでのお給料のふくろをわたそうとすると、

むすめは、それを両手でおしかえしました。
「とんでもない。畑をかりているおれいです。」
それから、むすめは、おじぎをすると、にげるように帰っていきました。
よく日、つぼみさんは町に出かけて、むすめのために花がらのエプロンを買うと、それを持って山の畑に出かけました。
（ここに来るの、何年ぶりかしら。）
畑について、つぼみさんの目にとびこんできたのは、二ひきのウサギでした。
（たいへん、ウサギが、畑をあらしているわ！）
でも、すぐに、つぼみさんは、そうではないことに気がつきました。二ひきは、ダイコンをぬいているところだったのです。
（そういうことだったの――――。）
つぼみさんは、畑のダイコンに見とれました。あおあおとした葉っぱの下から、雪のようにまっ白な根が顔を出しています。
（山のよい空気と水で、ウサギさんたちが、たんせいこめて育てたダイコンだもの、どんなダイコンよりおいしいはずだわ。）
つぼみさんは、エプロンのつつみを畑におき、こっそりと帰っていきました。
よく朝、ゆうすげ旅館の台所の外には、一かかえほどのダイコンがおいてあり、こんな手紙がそえられていました。
『すてきなエプロン、ありがとうございました。きのう、おかみさんが畑に来たのが、足音で分かったのですが、父さんもわたしも、ウサギのすがたを見られるのが、何だかはずかしくて、知らんぷりしてしまいました。いそがしくなったら、また、おてつだいに行きます。ウサギの美月より』

Ⅱ　学習目標

○　美月たちがウサギと分かっていてもこっそり帰るつぼみさんの優しさと心配り、それに応える美月たちとの心の通じ合いが分かる。
○　場面の移り変わりに注意しながら、登場人物の性格や気持ちの変化、情景などについて、叙述を基に想像して読むことができる。
○　文章を読んで考えたことを発表し合い、一人一人の感じ方について違いのあることに気付くことができる。
○　言葉には、考えたことや思ったことを表す働きがあることに気付くことができる。

Ⅲ　文章構成と時間・時数

場面	ページ	時間	時数
一	P46L4 ～ P46L10	1	1
二	P46L11 ～ P48L2		
三	P48L3 ～ P51L8	1	2
四	P51L9 ～ P52L5	1	3
五	P52L6 ～ P53L13		
六	P54L1 ～ P55L13	1	4
七	P56L1 ～ P56L7		

Ⅳ　授業構想

1　第一・二場面（第一時）

ア　わか葉のきせつでした。イゆうすげ村のゆうすげ旅館では、山に林ウ道を通す工事の人たちがとまりに来て、ひさしぶりに、六人ものたいざいのお客さんがありました。ひとりで旅館を切りもりしているつぼみさんは、朝早くから夜おそくまで息をつくひまもありませんでした。

わかいころなら、お客さんの六人ぐらい、何日とまってもへい気でした。でも、年のせいでしょうか。一週間もすると、ふとんを上げたり、おぜんを持ってかいだんを上がったりするのが、つらくなってきたのです。

ある日、つぼみさんは、夕飯の買い物から帰るとちゅう、重い買い物ぶくろをちょっとの間道ばたに下ろして、ついひとり言を言いました。

「せめて、今とまっているお客さんたちが帰るまで、だれか、てつだってくれる人がいないかしら――――。」

そのよく朝のことです。つぼみさんが、朝ご飯のかたづけをしていると、台所に、色白のぽっちゃりとしたむすめが、何本ものダイコンを入れたかごを持って、やってきました。

「おはようございます。わたし、美月っていいます。おてつだいに来ました。」

「えっ？」

つぼみさんが、きょとんとしていると、むすめは、親しげにわらいかけました。

「ほら、きのうの午後、だれかてつだってくれる人がいないかしらって、言ってたでしょ。」

（へんねえ。買い物の帰り、だれにも会わなかったけど――――。）

つぼみさんは、首をかしげました。

2　教材解釈

ア「わか葉のきせつ」

・「わか葉」＝草や木の、生えて間もない頃の葉。

・季節は初夏（夏の初め頃）。

イ「ゆうすげ村のゆうすげ旅館」

・「ゆうすげ」＝（夕菅）ユリ科の多年草。山地の高原に自生。高さ約一メートル。初夏、淡黄色のユリに似た細長い花を夕方開いて、翌日の午前中にしぼむ。キスゲ。

・ゆうすげ村は高原地帯にあり、季節的にゆうすげの花が咲いている頃である。

・ゆうすげが多く群生しているところから「ゆうすげ村」、その村の旅館だから「ゆうすげ旅館」と名をつけたのであろう。ファンタスティックなストーリーにふさわしいネーミングである。

・「旅館」＝旅行している人からお金を取って泊まらせる所。主に、日本風の作り方。宿屋。

ウ「林道」

・林の中の細い道。

エ「通す」

・通らせる。

オ「ひさしぶり」

・長い間経った後。しばらくぶり。ひさかたぶり。

カ「六人もの」

・六人からの。六人もという。

・いつもは旅館に泊まる人が少ない。

キ「たいざい」

・よその土地へ行って、そこに長くとどまること。

・旅館に長く泊まること。

ク「切りもり」

・あれこれと世話や準備をすること。

ケ「つぼみさん」

・ゆうすげ旅館は草花の名前。その草花の花が咲く前の、ふくらんだ状態が「つぼみ」。つぼみさんの親が、いつか花が咲くようにという願いから命名したのであろう。

コ「息をつくひまもありません」

・「息をつく」＝ほっとする。

・「ひま」＝時間。

・ほっとする時間もありません。

・旅館の仕事の忙しさから。

・旅館の仕事――三度の食事の支度と後片付け、風呂の準備と掃除、ふとんの準備と後片付け、浴衣などの洗濯・取り込み・

片付け、部屋の掃除など。

サ「わかいころなら」

・　今は年齢を増してきている。

シ「六人ぐらい」

・　前出の「六人もの」と「六人ぐらい」を比較すると、「六人もの」は、六人でも多すぎると感じている表現になる。

ス「へい気」

・　気にもとめないこと。大丈夫。かまわないこと。

・　体力があったから大丈夫であった。

セ「年のせいでしょうか」

・　「年のせい」＝年をとったため。

・　「か」＝詠嘆の意を表す。〜かなあ。多く、事に気づいた時の心の動揺を表す。

ソ「上げたり」

・　「あげる」＝下に敷いてある物を取りのける。

タ「おぜん」

・　食べ物を載せる台。

チ「つらく」

・　「つらい」＝我慢できないほど苦しい。

ツ「夕飯」

・　夕方の食事。夕食。晩御飯。

・　「ゆうめし」とも読むので、「ゆうはん」のルビがふられている。

テ「道ばた」

・　道のわき。

ト「つい」

・　思わず。

ナ「ひとり言」

・　聞く相手がいないのに、一人でものを言う。

ニ「せめて」

・　十分でないが少なくとも。ほかのことはそのままにして。

ヌ「だれか」

・　はっきり特定できない人を指す。

ネ「かしら」

・　（「〜か知らん」の転。主として女性が用いる）願望・依頼の意を表す。かしらん。

ノ「--------」

・　「いるといいのにねえ」「やっぱり無理かしら」

ハ「そのよく朝」

・　つぼみさんが、「だれか、てつだってくれる人いないかしら

ーーーー。」とひとり言を言った次の朝。

ヒ「色白のぽっちゃりとしたむすめ」

・「色白」＝肌の色の白いこと。

・ウサギの化身であるから肌が白い。

・「ぽっちゃり」＝（多くは女性の顔や手足の）肉づきがよくて小さく丸く太って愛らしく見えるさま。

・ウサキの容姿を備えたむすめとして描かれている。

フ「何本もの」

・数は分からないが数本の。

ヘ「美月」

・月にある黒い影がウサギに見えることから、「美月」と名づけたのであろう。

・「美月」は、「びげつ」「みげつ」「びつき」「みつき」とも読めるのでルビをふったのであろう。

ホ「えっ？」

・意外なことに驚いて発する声。

マ「きょとんと」

・驚いて、ぽかんとしている様子。

ミ「親しげに」

・「親しい」＝仲がよい。こころやすい。

・親しそうに。仲がよさそうに。こころやすそうに。

ム「ほら」

・急に注意を促す時に言う語。

メ「言ってたでしょ」

・「きのうの午後」「だれかてつだってくれる人いないかしら」と日時・ひとり言の内容まで知っているから、どこかで聞いていたことになる。

モ「へんねえ」

・おかしいねえ。

ヤ「ーーーーーー」

・「なぜ知ってるのかしら。」「誰かいたのかしら。」

ユ「首をかしげました」

・「首をかしげる」＝おかしい、変だと考えこむ。

3　本時の目標

ゆうすげ旅館のつぼみさんは年のせいで働くのがつらくなり、誰かに手伝ってほしいと思っていると美月という娘が来てくれたことが分かる。

4　板書

わか葉のきせつ
ゆうすげ
六人もの

たいざい
切りもり
息つくひま

年のせい
おぜん
つらく
つい
せめて

――――――

ぽっちゃり
きょとん
親しげ

・夏のはじめ
・草花の名前（説明）
・六人からの
・六人もという
・六人でも多い
・旅館に長くとまる
・世話やじゅんび
・ほっとする時間
・旅館の仕事
・年を取ったため
・食べ物をのせる台
・がまんできないほど苦しい
・思わず
・ほかのことはそのままにして、少なくとも（説明）
・いるといいのにねえ
・やっぱりむりかしら
・ふっくらとしてかわいらしい（説明）
・ぽかん
・親しそうに、なかがよさそうに（説明）
・どこかで聞いていた
・なぜ知ってるのかしら
・だれかいたのかしら
・おかしいと考えこむ

言ってたでしょ

――――――

首をかしげ

5　発問・説明

(a)「わか葉のきせつ」

①　春夏秋冬のどの季節か。

②　その季節の初め、中、終わりのいつ頃か。

(b)「ゆうすげ」というのは、ユリの仲間で約一メートルの高さになり、薄い黄色の花で夕方咲いて次の日の朝にしぼむ。

(c)「六人もの」

①　「もの」を別の言葉で言うと、どんな言葉になるか。

②　「六人」と「六人もの」と比べるとどちらが多い感じになるか。

(d)「たいざい」とは、旅館でどうすることか。

(e)旅館を「切りもり」するとは、どうすることか。

(f)「息をつくひま」

①　別の言葉で言うと、どんな言葉になるか。

② 何で「息をつくひま」もないのか。

③ 旅館の仕事には、どんなものがあるか想像してみよう。

(g) 「年のせい」を別の言葉で言うと、どんな言葉になるか。

(h) 「おぜん」とは何か知っているか。

(i) 「つらく」とは、どんな様子になることか。

(j) 「つい」を別の言葉で言うと、どんな言葉になるか。

(k) 「せめて」というのは、「ほかのことはそのままにして」「少なくとも」という意味である。

(l) 「--------」をつぼみさんの言葉にすると、どんな言葉になるか。

(m) 「ぽっちゃり」とは、ふっくらとして可愛らしい様子を言う。

(n) 「きょとん」を別の言葉で言うと、どんな言葉になるか。

(o) 「親しげ」とは、「親しそうに」「仲がよさそうに」という意味である。

(p) 美月の「言ってたでしょ」から、どんなことが分かるか。

(q) 「--------」をつぼみさんの言葉にすると、どんな言葉になるか。

(r) 「首をかしげ」とは、どんな様子でどんな気持ちの時か。

6 まとめ

つぼみさんが最近思っていることや手伝いに来た美月についての感想を書こう。

まとめに感想を取り入れたのは、学習指導要領国語編の「読むこと」の言語活動例に「ア物語や詩を読み、感想を述べ合うこと」とあるがそれに準じたものである。

1 第三場面（第二時）

「わたし、こちら(ア)の畑をかりている宇佐見(イ)のむすめです。父さんが、よろしく(ウ)って言ってました。これ、あの畑で作ったウサギダイコンです。」

むすめは、持ってきた(エ)ダイコンを、つぼみさんにさし出(オ)しました。

ゆうすげ旅館では、山(カ)の中に小さな畑を持っていました。でも、つぼみさんのだんなさん(キ)がなくなった後、畑は、草ぼうぼう(ケ)になっていました。

ところが、去年(サ)の秋、そんな畑(シ)をかりたいと、宇佐見という男の人がやってきたのです。つぼみさんは、そのままにしておくのが気(セ)になっていましたので、こころよく(ソ)かすことにしました。

「こちらからおねがいしたいほど(チ)です。おれいなんていりませんからね。」(タ)

つぼみさんの言葉に、男の人(ツ)は、うれしそうに帰っていきました。

「あなた、宇佐見さんのむすめさんなの。せっかく来てくれたんだから、てつだってもらいましょうか。それにしても、みごとなダイコンだこと。ネズミダイコンなら聞いたことあるけど、ウサギダイコンっていうのもあるのね――――。」

むすめは、くるくるとよくはたらきました。そうじもせんたくも、さっさとして、まるで、むかしから、ゆうすげ旅館をてつだってきたみたいなのです。

午後になると、むすめは、ちょっと出かけて、たんぽぽの花とよもぎの葉っぱをつんできました。

「今ばんてんぷらにしませんか。それから、ふろふきダイコンとダイコンのサラダ作りませんか。わたし、料理得意なんです。」

こうして、そのばんのゆうすげ旅館のこんだては、たんぽぽの花とよもぎの葉っぱのてんぷらに、ゆずみそのふろふきダイコンと、ダイコンのサラダ、それから、ぶりのてり焼きになりました。てんつゆにも、焼き魚にも、たっぷりのダイコンおろしがつきました。

「いやあ、あまくて、おいしいダイコンだねえ。今夜の料理は、どれもこれも、ほんと、おいしかった。」

お客さんのひょうばんが、あまりよかったので、よく日も、そのまたよく日も、ゆうすげ旅館のこんだては、ダイコンづくしになりました。むすめは、毎朝、とれたてのダイコンを持ってきて、せっせと、ダイコンの料理を作りました。

2　教材解釈

ア「こちら」

・　ゆうすげ旅館のこと。つぼみさんのこと。

イ「宇佐見」

・　ウサギをもじった苗字で、ここからもウサギであることをほのめかしている。

ウ「よろしく」

・　「よろしくお伝えください」「よろしくお願いします」などを略した挨拶の語。

エ「持ってきたダイコン」

・　畑を借りているお礼にと持ってきた。

オ「さし出しました」

・　「さし出す」＝前へ出す。

カ「山の中に小さな畑」

・　ウサギが住む環境の中にある畑である。

キ「だんなさん」

・「だんな」＝主人。夫。
・ゆうすげ旅館の主人。つぼみさんの夫。

ク「たがやす人がいなくなって」
・「たがやす」＝作物を植える準備として、田畑を掘り返す。
・この畑はだんなさんがやっていたのであるが、だんなさんがなくなってからというもの、つぼみさんは旅館の仕事で手が回らなくなっていたのであろう。

ケ「草ぼうぼう」
・草が生えてよく茂る様子。

コ「ところが」
・そうであるのに。それなのに。

サ「去年の秋」
・つぼみさんが、過去の出来事を思い出している。
・畑を貸してから、冬・春・夏の初めと経過している。

シ「そんな畑」
・草ぼうぼうの畑。

ス「そのままにしておくのが」
・草ぼうぼうのままにしておくのが。

セ「気になって」
・「気になる」＝気にかかる。心配。

ソ「こころよく」
・気持ちよく。

タ「こちらから」
・つぼみさんの方から。私の方から。

チ「ほど」
・くらい。

ツ「男の人」
・宇佐見という男の人。美月の父さん。

テ「なの」
・「なのですか」が略された形。主として女性が用いる。

ト「せっかく」
・わざわざ。

ナ「それにしても」
・そうだけれど。それはそれでいいとしても。

ニ「みごと」
・りっぱな様子。すばらしい様子。

ヌ「ネズミダイコン」
・ダイコンの栽培品種。根はずん胴で、先は急にとがり、長さ二十五センチメートル、径六センチメートル内外。辛味が強い。滋賀県伊吹山地方でつくられ、薬味に用いられる。いぶきだい

こん。

ネ「ウサギダイコンっていうのもあるのね」

・　実際にはウサギダイコンはない。ネズミダイコンをもじり、ウサギが栽培したダイコンということであろう。

ノ「――――」

・　「知らなかったわ」「へーっ」「おもしろいね」

ハ「くるくる」

・　こまめ（ほねおしみせず、きまじめに）に働く様子。

ヒ「さっさと」

・　すばやく。急いで。

フ「まるで」

・　ちょうど。

ヘ「午後になると」

・　前出の文「むすめは、くるくるとよくはたらきました」は、数日間のむすめの様子ではなく、美月が手伝いに来たその日の午前中のことであり、「午後になると」はその日の午後のこと。

ホ「よもぎ」

・　キク科の多年生植物。山野に生え、秋小さな花を開く。若葉は草餅に、成熟した葉はもぐさとする。

マ「つんで」

・　「つむ」＝指先などで草や花をとる。

ミ「ふろふきダイコン」

・　ダイコンを柔らかくゆで、その熱い間に練り味噌を塗って食べる料理。

ム「得意」

・　じょうずなこと。おてのもの（よく慣れていて、たやすくできること）。

メ「こんだて」

・　料理の種類。

モ「ゆずみそ」

・　ゆずの実の汁や刻んだ皮をすりまぜて、香りをつけたねった味噌。

ヤ「ぶり」

・　アジ科の近海魚。長さ一メートル以上。食用。いわゆる出世魚で、成長するにつれて「わかし」→「いなだ」→「わらさ」→「ぶり」と名が変わる。

ユ「てり焼き」

・　魚に、みりんと醤油とを混ぜた汁をつけて焼いた料理。

ヨ「てんつゆ」

・　てんぷらを食べる時のつけ汁。だし汁に醤油・みりんを合わ

せて作る。

ラ「たっぷり」

・　十分な様子。たくさんな様子。

リ「ダイコンおろし」

・　ダイコンをおろし金ですりおろした物。

ル「いやあ」

・　「いや」＝驚いた時、感嘆した時などに発する声。

レ「どれもこれも」

・　「どれ」＝はっきりと決まっていない物を指す語。

・　「これ」＝自分の近くにある物。この物。

・　あれもこれも全部。

ロ「ひょうばん」

・　うわさ。とりざた。

ワ「ダイコンづくし」

・　「づくし」＝その類の物を全部並べあげる意を表す。

・　ダイコンを使った料理ばかり。

ヲ「せっせと」

・　休まないで一生懸命に。

3　本時の目標

ウサギダイコンを持って手伝いに来た美月の料理が、客に評判が良くてダイコンづくしの料理を作ったことが分かる。

4　板書（＊は教師の説明の箇所）

宇佐見　・ウサギにした名前

山の中に　・ウサギの住むところ

そんな畑　・草ぼうぼう

そのままにしておく　・旅館の仕事

こころよく　・たがやせない

せっかく　・気持ちよく

それにしても　・わざわざ

みごと　・そうだけれど

・それはそれでいいとして

・りっぱ

・すばらしい

ネズミダイコン　＊

ウサギダイコン　・ウサギの作ったダイコン

・知らなかったわ

・おもしろいね

くるくる　・まじめによくはたらく

さっさと　・すばやく
　　・急に
まるで　・ちょうど
午後になると　・てつだいにきたその日
つんで　・ゆびでとる
ふろふきダイコン　＊
とく意　・じょうず
こんだて　・料理のしゅるい
ゆずみそ　＊
ぶり　＊
照り焼き　＊
てんつゆ　＊
ダイコンづくし　・ダイコンばかりの料理
せっせと　・休まないで一生けんめい

5　発問・説明

(a)「宇佐見」という名前は、何に似ているか。

(b)「宇佐見」という名前や「ウサギダイコン」から、「山の中に」は、何が住んでいると考えられるか。

(c)「そんな畑」「そのままにしておく」

①　どんな様子の畑か。
②　なぜそうなったのか。
③　つぼみさんがなぜ耕さないのか。

(d)別の言葉で言うと、どんな言葉になるか。
①「こころよく」
②「せっかく」
③「それにしても」
④「みごと」

(e)「ネズミダイコン」というのは、丸くて先が尖り二十五センチメートルぐらいの長さで辛いダイコンである。滋賀県の伊吹山地方で作られ、いぶきだいこんとも言われている。

(f)なぜ「ウサギダイコン」という名前がついているのか。

(g)「－－－－－－」をつぼみさんの言葉にすると、どんな言葉になるか。

(h)別の言葉で言うと、どんな言葉になるか。
①「くるくる」
②「さっさと」
③「まるで」

(i)「午後になると」とは、いつの日の午後のことか。

(j)「つんで」とは、どうすることか。

(k) 「ふろふきダイコン」というのは、ダイコンを柔らかくゆでて、その熱い間に味噌を塗って食べる料理のことである。

(l) 「得意」を別の言葉で言うと、どんな言葉になるか。

(m) 「こんだて」とは何か。

(n) 「ゆずみそ」というのは、味噌の中にゆずの実の汁や刻んだ皮を混ぜた物である。

(o) 「ぶり」というのは、一メートル以上の大きさの魚で、「わかし」「いなだ」「わらさ」「ぶり」と大きくなるにつれて名前が変わる。

(p) 「照り焼き」というのは、魚にみりんと醤油を混ぜた汁をつけて焼いた料理のことである。

(q) 「てんつゆ」いうのは、てんぷらを食べる時につける汁のことである。

(r) 「ダイコンづくし」とは、どんな料理のことか。

(s) 「せっせと」を別の言葉で言うと、どんな言葉になるか。

6 まとめ

ウサギダイコンとダイコンの料理を作る美月についての感想を書こう。

1 第四・五場面（第三時）

さて、ダイコンづくしの料理がつづくようになったある日、仕事から帰ってきたお客さんが言いました。

「近ごろ、耳がよくなったみたいなんですよ。小鳥の声や、動物の立てる音が、実によく聞こえるんです。おかげで、工事であやうくこわすとこだった小鳥の巣を見つけて、ほかにうつしてやれましたよ。」

それを聞くと、つぼみさんは、はっとしました。そういえば、つぼみさんの耳も、近ごろ、きゅうによくなった気がします。遠くの小鳥の声や、小川のせせらぎが、しょっちゅう聞こえてくるのです。夜など、みんながねしずまって、あたりがしいんとすると、はるか遠い山の上をふく風の音を、今どのあたりをふいているのか、聞き分けることができました。

またたく間に、二週間がすぎて、たいざいのお客さんたちは、仕事が終わり、ゆうすげ旅館を引き上げていくことになりました。

お客さんが帰って、後かたづけがすむと、むすめはおずおずとエプロンを外しました。

「それじゃあ、わたしも、そろそろおいとまします。」

「えっ、もう帰ってしまうの。」

つぼみさんががっかりすると、むすめは、下を向きました。

「畑のダイコンが、今、ちょうど、取り入れごろなんです。父さん（フ）ひとりじゃたいへんだから。しゅうかく（ヘ）がおくれると、まほうの（ホ）きき目が、なくなってしまうんです。」

「まほうのきき目って？」

「耳（マ）がよくなるまほうです。夜は、星の歌も聞こえるんですよ。」

（だから、お客さんもわたしも、急に耳がよくなったんだ。）

つぼみさんは、大きくうなずき（ミ）ました。

「じゃあ、引き止める（ム）わけにはいかないわねえ。」

つぼみさんが、これまでのお給料（メ）のふくろをわたそうとすると、むすめは、それを両手（モ）でおしかえしました。

「とんでもない（ヤ）。畑（ユ）をかりているおれいです。」

それから、むすめは、おじぎをすると、にげる（ヨ）ように帰っていきました。

2　教材解釈

ア「近ごろ」

・　このごろ。最近。

イ「耳がよくなった」

・　聞く能力、聞き分ける能力がよくなった。

・　前文に「ダイコンづくしの料理がつづくようになった」とあるから、ウサギダイコンと耳がよくなったことと関係があることをほのめかしている。

・　「兎耳」という言葉があるが、これは「よく人の隠し事を聞き出すこと」という意味であり、ウサギと耳との関係を表している。

ウ「みたい」

・　～ようだ。～らしい。

エ「小鳥の声や、動物の立てる音」

・　工事をしている山で聞く声や音。

オ「実に」

・　本当に。まったく。

カ「おかげで」

・　「おかげ」＝物事がもたらす結果。影響。

・　耳がよくなったおかげ。よく聞こえるおかげ。

キ「あやうく」

・　もう少しで。

ク「とこ」

・　「ところ」の俗語（日常の話し言葉）。

ケ「はっと」

・　急に気がついて驚く様子。

コ「そういえば」

・　そのように言うならば。

サ「遠くの小鳥の声や、小川のせせらぎがしょっちゅう聞こえてくるのです」

・　「せせらぎ」＝川などの浅い所を流れる水の音。

・　「しょっちゅう」＝いつも。しじゅう。

・　つぼみさんの耳がよくなったことの例として「遠くの小鳥の声」と「小川のせせらぎ」の音。

シ「ねしずまる」

・　（夜更けて）人々が皆寝て静かになる。

ス「しいん」

・　物音一つ聞こえず、静まりかえっているさまを表す語。

セ「はるか遠い山の上をふく風の音を、今どのあたりをふいているのか聞き分けることができました」

・　「はるか」＝距離が遠く離れている様子。

・　「あたり」＝おおよその場所。

・　遠く離れた山の上をふく風の音が聞こえ、その上おおよそどの場所をふいているのかを聞き分けることができた。ものすごく、よく聞こえる耳である。

ソ「またたく間」

・　ほんのちょっとの間。たちまち。

タ「引き上げていく」

・　「引き上げる」＝仕事などが終わって帰る。

・　工事の仕事が終わって帰っていく。

チ「後かたづけ」

・　物事が終わったあとを整理すること。後始末。

ツ「おずおず」

・　おそるおそる。こわそうに。

・　美月がつぼみさんを怖がっているのではなく、旅館を去ることを申し訳なく思っている様子。

テ「エプロン」

・　衣服の汚れを防ぐための前かけ（体の前などにかける布）。

ト「外しました」

・　「外す」＝掛けたものを取って離す。

ナ「それじゃあ、わたしも」

・　「それじゃあ」＝「それでは」の転。それなら。そういうことで。

・　たいざいのお客さんが引き上げていったので、「それなら、わたしも」の意。

ニ「そろそろ」
・　まもなく。やがて。
ヌ「おいとま」
・　訪ねて行った所を去ること。
・　ゆうすげ旅館を去ること。
ネ「もう帰ってしまうの」
・　お客さんが帰ってもまた居てくれるものと思い込んでいた。
ノ「がっかり」
・　思い通りにならないで、力を落とす様子。
・　つぼみさんは、「せめて、今とまっているお客さんたちが帰るまで、だれか、てつだってくれる人がいないかしら――――。」とひとり言を言っていたが、美月と毎日暮らすのが楽でもあったし、娘が出来たようで楽しかったのであろう。「えっ」という驚きと共に力を落とし残念に思っている。
ハ「下を向きました」
・　お客さんが帰るまでというつぼみさんのひとり言に手伝いに来たが、つぼみさんのがっかりした様子に申し訳なく、つぼみさんを見ていられず下を向いてしまった。
ヒ「取り入れごろ」
・　「取り入れ」＝実った作物を取り入れること。
・　「ころ」＝ある事にちょうどよい時機。ころあい。
・　実ったダイコンを取り入れる（収穫）ちょうどよい時。
フ「父さんひとりじゃたいへんだから」
・　「たいへん」＝非常に苦労する様子。
・　「だから」の後に、「わたしもてつだわなければならない」が省略。
ヘ「しゅうかく」
・　取り入れ。
ホ「まほうのきき目」
・　「まほう」＝不思議なことをする術。
・　「きき目」＝効く力。
・　耳がよくなったのは、ウサギダイコンの「まほうのきき目」であったことが明らかになる。
マ「耳がよくなるまほう」
・　美月は、がっかりしているつぼみさんに、どうしても帰らなければならない理由として、魔法効き目の「耳がよくなる」ことを話さざるを得なかったのであろう。
・　耳がよくなって聞こえる声や音は、小鳥の声、動物の立てる音、小川のせせらぎ、風の音、星の歌など、すべて自然の中のものである。

ミ「うなずき」
・「うなずく」＝分かった、納得したという意味で、頭を前に振る。
ム「引き止めるわけ」
・「引き止める」＝行こうとするのを止める。
・「わけ」＝〜できない、〜する筋道ではないの意。
・引き止めることはできない。
メ「お給料」
・「給料」＝やとい主が、働いている人に対して支払うお金。
モ「りょう手でおしかえしました」
・片手ではなく、両手で押し返したところに、意志の堅いこと、断固としてもらえない様子を表している。
ヤ「とんでもない」
・とても考えられない。思いもよらない。
ユ「畑をかりているおれいです」
・美月は、手伝いに来た理由を「だれかてつだってくれる人いないかしらって、言ってたでしょ」と言っていたが、実は「おれい」のため、恩返しのためであったことが分かる。これも恩返し譚の一種であろう。
ヨ「にげるように」
・「にげる」＝つかまらないように、その場から離れる。
・つぼみさんに給料の袋を押しつけられないうちに。

3　本時の目標

耳がよくなったのはウサギダイコンの魔法のせいであり、畑を借りているお礼のために手伝いに来ていた美月は、ダイコンの収穫のために帰っていったことが分かる。

4　板書

耳がよくなった

・聞く力
・聞き分ける力
・小鳥の声
・動物の立てる音
・小川のせせらぎ
・風の音
・本当に
・まったく
・もう少しで（説明）
・急に気がついておどろく
・あさい所を流れている水の音

実に

あやうく
はっと
せせらぎ

しょっちゅう　・いつも
ねしずまって　・ねてしずかになる
はるか　・遠くにはなれている
またたく間　・ほんのちょっとの間
・たちまち
おずおず　・もうしわけない
そろそろ　・間もなく
おいとま　・帰る
がっかり　・もっといてくれる
・楽ができた
・楽しかった
・自分のむすめみたい
下を向きました　・もうしわけない
・見ていられない
しゅうかく　・取り入れ
きき目　・きく力
耳がよくなるまほう　・ウサギダイコン
引き止める　・行こうとするのを止める
りょう手でおしかえし　・ぜったいもらえない
ました　とんでもない
・とても考えられない
・ぜったいだめ
おれい　・てつだい
にげるように　・お給料をもらわないため

5　発問・説明

(a)　「耳がよくなった」
①　耳がどうなることか。
②　お客さんやつぼみさんには、何が聞こえるようになったのか。

(b)　「実に」を別の言葉で言うと、どんな言葉になるか。

(c)　「あやうく」というのは、「もう少しで」という意味である。

(d)　「はっと」とは、どんな様子のことか。

(e)　「せせらぎ」とは、どんな音のことか。

(f)　別の言葉で言うと、どんな言葉になるか。
①　「しょっちゅう」
②　「ねしずまる」
③　「はるか」
④　「またたく間」

(g)　美月が「おずおず」とエプロンを外したのは、どんな気持ちからか。

(h) 「そろそろ」を別の言葉で言うと、どんな言葉になるか。
(i) 「おいとま」とは、どうすることか。
(j) つぼみさんが「がっかり」したのは、どんな気持ちからか。
(k) 美月が「下を向きました」とあるがなぜか。
(l) 「しゅうかく」を美月の言っている別の言葉で言うと、どの言葉になるか。
(m) 「きき目」とは、どんな意味か。
(n) 「耳がよくなるまほう」は、何にあるのか。
(o) 「引き止める」とは、どうすることか。
(p) 片手ではなく両手で「おしかえした」のは、美月にどんな気持ちが強かったのか。
(q) 「とんでもない」を別の言葉で言うと、どんな言葉になるか。
(r) 畑を借りている「おれい」のために、何をしに来たのか。
(s) 「にげるように」帰っていったのはなぜか。

6 まとめ

魔法のウサギダイコンのことやがっかりするつぼみさん、お給料を受け取らない美月などについて感想を書こう。

1 第六・七場面（第四時）

よく日、つぼみさんは町に出かけて、むすめのために花がらのエプロンを買うと、それを持って山の畑に出かけました。

（ここに来るの、何年ぶりかしら。）

畑について、つぼみさんの目にとびこんできたのは、二ひきのウサギでした。

（たいへん、ウサギが、畑をあらしているわ！）

でも、すぐに、つぼみさんは、そうではないことに気がつきました。二ひきは、ダイコンをぬいているところだったのです。

（そういうことだったの――――。）

つぼみさんは、畑のダイコンに見とれました。あおあおとした葉っぱの下から、雪のようにまっ白な根が顔を出しています。

（山のよい空気と水で、ウサギさんたちが、たんせいこめて育てたダイコンだもの、どんなダイコンよりおいしいはずだわ。）

つぼみさんは、エプロンのつつみを畑におき、こっそりと帰っていきました。

よく朝、ゆうすげ旅館の台所の外には、一かかえほどのダイコンがおいてあり、こんな手紙がそえられていました。

『すてきなエプロン、ありがとうございました。きのう、おかみさんが畑に来たのが、足音で分かったのですが、父さんもわたしも、

ニ ウサギのすがたを見られるのが、何だかはずかしくて、知ヌらんぷりしてしまいました。いそがしくなったら、また、おてつだいに行きます。ネ ウサギの美月より』

2　教材解釈

ア「花がらのエプロンを買うと」

・「花がら」＝布地などにつけた花をかたどった模様。

・手伝いに来てくれた美月は、給料を受け取らずに帰ってしまったので、給料の代わりに娘の美月が喜びそうな花柄のエプロンをプレゼントしようとした。

イ「山の畑に出かけました」

・山の畑は宇佐見という男の人に貸し、その娘が美月であること、山の畑のダイコンが取り入れ頃ということを知っていたので、山の畑に行けば美月に会えると思って出かけた。

ウ「ここに来るの、何年ぶりかしら」

・「ぶり」＝月日や時間が過ぎたことを表す。

・前に、「つぼみさんのだんなさんがなくなった後、畑は、たがやす人がいなくなって、草ぼうぼうになっていました。」とある。かなり長い間、畑へ来ていないことが分かる。

エ「目にとびこんできた」

・「とびこむ」＝思いもよらない物事が突然自分の方にやってくる。舞い込む。

・思いがけなく二ひきのウサギの姿が、つぼみさんの目に突然映ったことの強調。

オ「二ひきのウサギ」

・父さんウサギとむすめの美月ウサギ。

カ「あらしているわ！」

・「あらす」＝乱暴して、めちゃくちゃにする。散らかす。

・「わ」＝驚きを表す。

・畑をめちゃくちゃにしているわ！

キ「そうではない」ク「気がつきました」

・畑を荒らしているのではなく、ダイコンを抜いていることに気づいた。

・「ダイコンをぬいている」＝「取り入れ」「しゅうかく」

ケ「そういうことだったの」

・美月が言った「畑のダイコンが取り入れごろ」「父さんひとりじゃたいへん」ということと目の前の「二ひきのウサギ」から、美月とその父さんがウサギであることに気づいた。

コ「－－－－－－」

・「なるほど」「だから、まほうのダイコンね」

サ「見とれました」

・「見とれる」＝ほかのことを忘れて、うっとりとして見る。

シ「あおあお」

・大変青い様子。

・「青青」「青々」と漢字ではなく、平仮名なのは「青さ」を強調するため。

ス「雪のように」

・「まっ白」を強調するための比喩。

セ「顔を出しています」

・根の一部分だけが外に見える。

・擬人法。

ソ「ウサギさんたち」

・前に「ウサギ」と表現されているが、ここでは「ウサギさんたち」と「さん」がついている。美月とその父さんの正体がウサギであることを知って敬称をつけている。

タ「たんせいこめて」

・嘘のない本当の心をこめてすること。

チ「こっそりと帰っていきました」

・「こっそり」＝誰にも知られないように。ひそかに。そっと。

・美月とその父さんの正体がウサギであることを知っても、お礼にウサギダイコンを持って来てくれたり、手伝いに来てくれたりしたことに感謝して、二羽の仕事の邪魔をしないでプレゼントのエプロンだけを置いて、こっそり帰るつぼみさんの優しさや心配りが表れている。

ツ「一かかえ」

・両手をひろげて、いっぱいになるほどの。

テ「そえられて」

・「そえる」＝つけ加える。

・ダイコンのそばに手紙が置かれていた。

ト「すてき」

・すばらしい様子。

ナ「おかみさん」

・奥さん。つぼみさんのこと。

ニ「ウサギのすがたを見られるのが、何だかはずかしくて」

・「何だか」＝なんとなく。どうしてか分からないが。

・「はずかしい」＝きまりが悪い。てれくさい。

・ウサギであることの正体を、まともに見られるのがてれくさいから。

ヌ「知らんぷり」

・「知らんふり」＝知っていても知らないふりをすること。知らん顔。

ネ「ウサギの美月」

・ウサギであることを知ってもつぼみさんは、会わないでこっそりと帰って行ったことをうれしくそしてありがたく思い、美月でなくわざわざ「ウサギの」をつけて、自分の正体を明確にしている。つぼみさんと美月の心が通い合っていることを表している。

3　本時の目標

つぼみさんは、美月たちがウサギであることを知ってもこっそりと帰る優しさや心配りに、美月たちもうれしくありがたく思っていることが分かる。

4　板書

花がらのエプロン　・お給料のかわり
・プレゼント
何年ぶり　・長い間来ていない
目にとびこんできた　・目にとつぜんうつった（説明）
二ひきのウサギ　・父さんと美月

あらして　・まだ知らない
そうではないことに　・めちゃくちゃに
気がつきました　・ダイコンをぬいている
ダイコンをぬいている　・取り入れ
そういうことだったの　・しゅうかく
・父さんと美月はウサギと気づく
・畑のダイコンの取り入れごろ
・父さんひとりじゃたいへん
・なるほどね
・だから、まほうのダイコンね
・青いことを強めている
・美月たちのことだから
・本当の心をこめて
・仕事のじゃまをしない
・やさしさ
・心くばり
・おかれて
・てれくさい
・きまりがわるい

あおあお
ウサギさんたち
たんせいこめて
こっそり

そえられて
はずかしくて

知らんぷり　・知っていても知らないふり
ウサギの美月　・うれしい
・ありがたく思っている
・心が通じている

5　発問・説明

(a)　つぼみさんが、花がらのエプロンを買って山の畑に出かけたのはなぜか。
(b)　「何年ぶり」から、どんなことが分かるか。
(c)　「目にとびこんできた」というのは、つぼみさんの目に突然映ったことを表している。
(d)　「二ひきのウサギ」
①　誰たちのことか。
②　この時、つぼみさんはそのことに気づいていたのか。
(e)　「あらして」いるとは、畑をどうしていることか。
(f)　「そうではない」「気づきました」とは、何が分かったのか。
(g)　「ダイコンをぬいている」が、ダイコンをぬくことを前にどんな言葉で書かれていたか。
(h)　「そういうことだったの」
①　つぼみさんは、何に気づいたのか。
②　どんなことから気づいたのか。
(i)　「－－－－－－」をつぼみさんの言葉にしてみよう。
(j)　「あおあお」は、漢字でなくてなぜ平仮名なのか。
(k)　前は「ウサギ」だったのに、今度は「ウサギさん」になっているのはなぜか。
(l)　「たんせいこめて」とは、どういう意味か。
(m)　つぼみさんが「こっそり」帰って行ったことから、つぼみさんのどんな心が分かるか。
(n)　「そえられて」とは、どうしてあったのか。
(o)　「はずかしくて」とは、どんな気持ちだったのか。
(p)　「知らんぷり」とは、どうすることか。
(q)　手紙にわざわざウサギと書いたのは、つぼみさんをどう思っているからか。

6　まとめ

父さんと美月がウサギであることを知ってもこっそり帰るつぼみさんと、「ウサギの美月」と書いている美月についての感想を書こう。

参考文献

1 「ニャーゴ」みやにしたつや　文・絵　教科書　二年　東京書籍
2 『新しい国語　教師用指導書　研究編　二上』　東京書籍
3 「ゆうすげ村の小さな旅館」茂市久美子　文　三年　東京書籍
4 『新しい国語　教師用指導書　研究編　三上』　東京書籍
5 『国語大辞典』金田一春彦　編　小学館　一九八二年発行
6 『広辞苑』新村出　編　岩崎書店　一九七七年発行
7 『新選国語辞典』金田一京助　編　小学館　一九八八年発行
8 『全訳　漢辞海』佐藤進　編　三省堂　二〇〇四年発行
9 『小学国語辞典』旺文社　編　二〇〇九年発行